

国立国語研究所学術情報リポジトリ

温度を表す形容詞の意味体系：
《物》と《場所》の対立

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2019-03-25 キーワード: 温度, 物, 場所, 触覚, 意味体系 作成者: 久島, 茂, KUSHIMA, Shigeru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001978

温度を表す形容詞の意味体系

——《物》と《場所》の対立——

久島 茂

(静岡大学)

キーワード

温度, 物, 場所, 触覚, 意味体系

要 旨

温度を表す形容詞は、量を表す形容詞の場合と同じく、それが《物》の性質か《場所》の性質かという違いに基づいて体系化されていると考えられる。つまり、「冷たい」系列と「寒い」系列の別である。

《物》の温度と《場所》の温度という対立は対象側の意味として認められるもので、これに更に、主体側の意味として、《非統一的(局所的)感覚》と《統一的感覚》という対立が重なっている。このように温度形容詞が《感覚》の意味要素も持つのは、量が視覚によって非自覚的に捉えられるのと異なって、温度感覚が自覚的であるためであると考えられる。そこで、(量の形容詞と違って)温度形容詞は感覚部位を表す語を主語として取ることもできることになる。

本稿は、生理学の知見が意味の分析にどのように役立つかを考慮しつつ、語彙の体系化を試みる。

1. 初めに

量を表す形容詞は、対象が《物》か《場所》かという観点から2種に分けられ、《物》の量を表す語彙は形の特徴に基づいて体系を成し、《場所》の量を表す語彙は方向の特徴に基づいて体系を成している、と考えられる(久島(1993))。

温度を表す形容詞には、「冷たい」「ぬるい」の類と「寒い」「涼しい」の類があるが、前者は「～物」「これは～」と言えて、「～場所」「ここは～」と言えないので、《物》の温度を表し、後者は「～場所」「ここは～」と言えて、「～物」「これは～」と言えないので、《場所》の温度を表しているのではないか。また一方、長い物を見て「目が長い」と言えないのに、冷たい物に触れて「手が冷たい」、寒い部屋の中にいて「体が寒い」のように感覚部位を表す語を主語にできるのはなぜだろうか。

量を表す形容詞とどのように異なるか比べながら、《物》《場所》《感覚》という、より一般的な意味の観点から、温度を表す形容詞の意味の体系を探りたい。

2. 諸説の検討

温度形容詞は2系列に分かれていることが既に指摘されている。「あつい」「暖かい」「ぬるい」

「冷たい」と「あつい」「暖かい」「涼しい」「寒い」である（「あつい」と「暖かい」については2系列の意味的対立が中和している）。

両系列の違いを、従来どのように解釈してきただろうか。代表的なものとして、服部（1968：46、129-130）（及び国広（1967：12-21））の温度を感じる部位が「身体の一部の皮膚」（国広「体の一部」）と「体あるいはその一部分全体（すなわち深部まで）」（国広「体の全部（体表面のほとんど全部にわたって深部まで）」）とで異なるとするもの、国広（1967）の「皮膚の浅部で感じる温度感覚」と「身体の深部、特に視床下部で感じる温度感覚」との違いとするもの（ほぼ同じ考えが、国広（1982：153）に、「体表面の感覚」（体表に分布する温覚と寒覚の神経による）と「体全体の感覚」（主として視床下部にある体温調節器官に基づく）の違いとして説明されている）¹、渡辺（1970）の「直接の接触感覚」の有無の差異とする説（ただし「ぬるい」は取り上げられていない）、影山（1980）の「物体温度」と「生理温度」の差異とする説、がある。

まず、服部（1968）に対しては影山（1980）の批判がある。つまり、第1に「秋の夜風は冷たい」と言う時の「冷たい」の感覚は全身的なものであって「身体の一部に限定されるとは断定できない」。第2に、「寒くて」毛皮のズボンと手袋を身につけた時、足と手の感覚が問題となっており、「寒い」は体全体の感覚を表していない。第3に、「身体部分によっては局所を冷却ないし過熱しただけで、震え（「寒さ」）や発汗（「暑さ」）が観察される」（中山（1970））。第3点は生理学的知見であるが、同時に我々の経験的知識でもあろう。以上の指摘のように、服部（1968）説はこのままでは問題があろう。

次の国広（1967）の浅部・深部説に対しても、影山（1980）の批判がある。急激に温度（室温）が低下した時、末梢温度受容器の情報が体温調節の強い入力となる（中山（1970：176））からである。つまり、皮膚温度受容器の情報だけで中枢受容器の関与なしに震えを引き起こすことがあるので、皮膚の浅部だけでも「寒い」と感じる（ふるえは「寒さ」の感覚とつながるであろう）ことがありうるわけである。しかし、我々は、「寒い」と震える時、皮膚の浅部ではなく、体の深部で低温に反応していると自覚しているであろう。このような経験的な事実を語の意味として捉えるべきと思われる。影山も、「つまるところ、身体の中のどの器官が温度感覚を司るかは生理学の問題であって、『冷たい』類と『寒い』類の言語学的使い分けには直接関与しないと思われる。」と述べている。影山は言語的な批判として、「たとえ体の深部が冷えていても、それが話し手の全体的生理感覚として捉えられなければ、『寒い』は不適當である。」と述べ、「足の髓が寒い」「視床下部が寒い」が成立しないことを根拠として挙げている。この影山の指摘は重要と思われるが、ただ、「足の髓が寒い」等が成立しないことを理由として、深部説が誤りであると主張することは無理であろう。「髓」は共起上の制限があって「足の髓」等と言いくく、「視床下部」は専門的な器官名で文体が異なり、寒さの感覚部位という意味は言語的にないからである。国広（1967）の問題は、「（冷水を飲んで）腹の中が冷たい」、「（寝ていて）肩が寒い」と言えるという点にある。「腹の中」を「皮膚の浅部」、「肩」を「身体の深部」とは（普通には）言いがたいからである。本稿では、「皮膚の浅部」や「腹の中」での感覚をまとめて《非統一的（局所的）感覚》、「体」や「肩」での感覚をまとめて《統一的感覚》と捉えたい。「腹の中が冷たい」と言う時、「腹の中」は深部であるが、そ

の感覚は局所的なものであって、自己の体が統一的に感じているものではない。一方、「肩が寒い」や「(坊主にして) 頭が寒い」と言う時、「肩」や「頭」は体の一部ではあるが、そこを外気温の通路として、「寒さ」を自己の体で統一的に感じ取っているであろう。その証拠として、「肩が寒い」等の代わりに「寒い」(体の統一的な感覚)と言っても矛盾や情報の不足はそれ程生じない。(「苦しい」も《体の統一的な感覚》を意味すると思われるが、「胸が苦しい」の代わりに「苦しい」とだけ言っても、やはり矛盾や不足は生じない。注4参照)「肩」や「頭」は普通衣類や毛髪に覆われており、そこが露出した時外気温の通路となって、「寒い」と言えるわけであるが、これに対して、「肌が寒い」や複合語「肌寒い」の「肌」は、衣類に覆われたままで露出してない。その感覚も《統一的》というより、体の表面だけの局所に近い。この「肌」については、固定的な表現に古語の意味が残ったものであって、特殊なものと考えたい。「肌寒し」は「蒸し衾なごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌之寒霜」(万葉集、524番)「旅衣八重着襲ねて寝ぬれどもなほ波太佐牟志妹にしあらねば」(万葉集、4351番)のように上代から存在した(『日本古典文学全集』による)。当時の「寒し」は《寒い》だけでなく《冷たい》も意味する(安部清哉(1985)参照)ので、その意味は《肌(体の表面)が冷たい》と考えられる。現代語の「肌が寒い」「肌寒い」も、この意味の残存として、「寒い」の一般の用法と区別したい。平安時代に「冷たし」が生じ、やがて《冷たい》の意味が「寒し」から奪われた時も、「肌寒し」にはこの意味が残ったわけである。その理由は、「肌」と「寒し」が固く結合しており、4音節の「冷たし」がそれより少ない音節の「寒し」に置き代わり得なかったのであろう。(「肌(が)寒い」は「うすら寒い」と意味が近いことを考えると、この「寒い」は《冷たい》から《寒い》へやや意味が動いているかもしれない。)

その次の、渡辺説の問題点としては、先の影山の第3番目の指摘が挙げられる。頭部や顔面の急激な(接触による)冷却がふるえを生じさせるので、「寒い」の系列も「直接の接触感覚」に基づくことがありうるわけである。更に、直接低温の物体に接触しなくても、冬の夜道を歩いて来て「手が冷たい」と言いうることが問題となるであろう。これは接触があってもなくても、「非統一的(局所的)感覚」であれば「冷たい」ということであろう。(「手が冷たい」の「手」は対象物でなく感覚器官であることについては後述する。)

影山の物体温度説に対しては、国広(1980)が「同じ部屋に放置され、物体として同じ温度を持っているはずの金属と木について『金属は木より冷たい』と言えることをどう処理すべきであろうか。」と批判している。物体の熱伝導度が温度感覚に影響を与えるわけであるが、しかし我々の経験としては、同じ部屋にあっても金属と木は同じ温度とは考えず、金属の方が冷たいと捉えられていると考えられる。

このことと関連して、科学的知識と我々の経験に基づく実感との違いに触れておきたい。

生理学では、「矛盾冷覚」と説明される次のような反応が知られている。「被験者が通常温かいと報告する範囲にある刺激温度が、冷点に適用されると、しばしば冷たいという報告をひき出す。読者は、この現象を、熱いシャワーの最初の数滴がしばしば冷たく思われるということで、経験したことがあるだろう。」(ミュラー(1966:131-132))これは、温度が45℃付近の時、熱さに対する反応時間の方が、冷たさに対する反応時間よりも長くかかるためと考えられている。このことは、

厳密には「熱い」「冷たい」の判定には「物体の温度や熱伝導度」だけでなく、皮膚温度受容器の反応の仕方が関わっていることを示している。しかし、この「矛盾冷覚」は、それが科学的に正しい説明としても、我々の常識と衝突するものである。我々は湯の前に水が少し出たのだと、現実をゆがめて解釈するであろう。言語的には、我々の経験的事実である実感を取り上げるべきであろう。

影山の「冷たい」類を物体温度とする説に対しては、渡辺説批判の中で述べた、物体が関与しなくても「(冬の夜道を歩いて来て)手が冷たい」と言えることが、問題となろう。「(水仕事をして)手が冷たい」の場合の「手」も、物体ではなく感覚部位と考えられる(後述)。これは、刺激対象に基づいた意味と別に、感覚部位に基づいた意味があるということであろう。また、「寒い」「涼しい」類を生理温度とする点についても、「部屋を涼しくする」と言えることから、《場所》の温度の意味もある(これについても後述する)ことを認めるべきであろう。

以下、「氷が冷たい」と「(自分の)手が冷たい」、「部屋が寒い」と「体が寒い」の両様の表現が可能となることを、語の意味に取り入れるために、《物の温度》《場所の温度》という観点と、《非統一的(局所的)感覚》《統一的感覚》という観点の両方から説明したい。

3. 《物》《場所》と《感覚》との関連

本稿では、「冷たい」の系列と「寒い」の系列との意味の違いを、

①対象側の意味として、《物》の温度と《場所》の温度の対立

②主体側の意味として、《非統一的(局所的)感覚》と《統一的感覚》の対立

と考えたい。つまり、2つの意味の側面があるということである。量の形容詞には②の意味はなかったが、温度感覚は視覚的知覚と違い、自覚的なために、この意味が加わるのだと考えられる。

3.1. 《物》《場所》の意味

まず①の対象側の意味については、物体温度を《物》の温度、人間を取り巻く空間の温度を《場所》の温度と考えたい。それは、「冷たい」系列は「～物」「これは～」と言えて「～場所」「ここは～」と言えず、「寒い」系列は逆の関係になっているからである。

例えば、水中に潜ったり氷枕を頭に当てて「寒い」と感じたとしても、水や氷枕は《物》であるから、「水(氷枕)が寒い」と言うことはできない。逆に、駅のホームにいて手が「冷たく」なった時も、「駅のホームは冷たい」と言うことはできない。(これらの文と意味が異なることになるが)《物》であれば「水(氷枕)が冷たい」、《場所》であれば「駅のホームは寒い」のように言うわけである。

中には、「風」のように「冷たい」とも「寒い」とも共起するものがある。しかし「風が冷たい」と言うと、「風」を一時的に触れて通り過ぎていくもの、つまり《物》と捉えているが、「風が寒い」と言うと、身の回りを取り囲んでいるもの、つまり《場所》的に捉えているであろう。「Tシャツ」についても、「冷たい」と共起する時は《物》として瞬間的に接触するもの、「寒い」と共起する時は持続的に身を包んでいるものとして《場所》的に捉えているであろう。²《物》が機能の

点から《場所》の性格を与えられることは、量の場合にも見られた。例えば、「高い」「深い」は《場所》の量を表すが、《物》である下駄・靴についても「高い下駄」「深い靴」のように言うことができる。これは下駄・靴が足に対して《場所》の機能を果たしているからである（久島(1993:55-56,63-64)参照）。

ところで、影山は「寒い」類の意味を《場所》の温度としないで生理温度としている。「この部屋は寒い」「北風が寒い」の意味について、影山は、「この部屋の中では／北風にさらされていると、私（人々）は寒い」と解釈し、『部屋』『北風』は形式上は主語であるが、実は、話者が寒いという判断を下す陳述状況を表わしており、意味上の主語は話し手なのである。」と述べている。このように、影山が「冷たい」類の意味を物体温度としながら、「寒い」類の意味を場所温度としないのは、「私は冷たい」が不成立なのに対して、「私は寒い」が「私はさびしい」と同じ様に成立し、「一般の主観表現と同じ振舞をするのは、『寒い』類だけである。」という理由からと考えられる。確かに、「冷房の効いた電車に乗ったら、だんだん寒くなった」の「寒い」は「私」の生理温度の側を意味していると考えられる。「～、電車がだんだん寒くなった」とは言えないので、変化しているのは、「電車」の温度でなく、人間の体温だからである。しかし、「部屋の暖房を消したら、だんだん寒くなった」の「寒い」は、生理温度でも「部屋」の温度でもありうる。「～、部屋がだんだん寒くなった」と言えるからで、この「寒い」は「部屋」の温度の側の意味とするのが自然であろう。特に「窓を開けて部屋を涼しくする」の「涼しい」は、人間の生理温度でなく、「部屋」の温度の側の意味と考えられる。「部屋が寒い」の「部屋」が「状況」を表していると解釈できたとしても、「部屋を涼しくする」の「部屋」は「状況」とはできず、「対象」ということになるからである。「状況」と解釈できなければ、この「涼しい」は人間の生理温度とできず、対象、つまり《場所》の温度の側の意味ということになる。なお、「涼しい」「暖かい」も「寒い」「暑い」も《場所》の温度の意味を持つが、《場所》の関与の仕方に差があり、「涼しい」「暖かい」の方が《場所》の関与が大きいと考えられる。「暑い」「寒い」は走ったり風邪をひいたりすると、《場所》の温度とある程度独立に人間の側から「私は暑い（寒い）」とすることができる。しかし、「暖かい」「涼しい」は人間の体温とは反対の方向に変化する必要があるので、必ず《場所》の温度の影響を受けなければならない。部屋にいて「だんだん暑く（寒く）なってきた」と言うと、部屋の温度の側の意味とも人間の生理温度の側の意味ともなり得るが、「だんだん暖かく（涼しく）なってきた」場合には、「私はだんだん暖かく（涼しく）なってきた」と言いにくい（「暖まってきた」等とは言える）ことから分かるように、人間の生理温度の側の意味とはなりにくく、「部屋がだんだん暖かく（涼しく）なってきた」という《場所》の温度の側の意味となるであろう。ここに《場所性》の違いが現れている。

3.2. 《感覚》の意味

では、②の主体側の意味である《感覚》の問題に移ろう。「冷たい」系列と「寒い」系列は《物》と《場所》の対立という点で量形容詞の「長い」系列・「高い」系列と平行的であるが、これらと違って、更に《感覚》の意味を合わせ持つ。派生語「長（高）がる」が不可能であるのに対して、

「冷た(寒)がる」が可能であるのは、「冷たい(寒い)」が人間の内的な感覚を意味するからである。また、「私は足が長い(鼻が高い)」とも「あの人は～」とも言えるのに対して、「私は足が冷たい(頭が寒い)」と言って「あの人は～」と言えない(「足・頭」を対象物でなく感覚器官の意味とする)のは、「冷たい(寒い)」の内的な感覚が話し手自身のものだからである(西尾寅弥(1972: 22, 23) 参照)。

「冷たい」の系列の意味が《感覚》とどのように関わっているかについて、影山は、「人間の(皮膚) 感覚を表現するものである」という説に反対して、『赤い』『うるさい』などは、人間やその器官でなく、対象物を主語にとる。『近所のピアノがうるさい』対『*私の耳がうるさい』。つまり、これらの形容詞、ならびに『冷たい』の類は、判断表現ではあるが、主観表現ではない。(58-59)」と述べている。

確かに「花が赤い」「音がうるさい」も「水が冷たい」も、形容詞は同じ様に対象物の性質を意味している。しかし「手が冷たい」については、「(握った相手の) 手が冷たい」の場合には「水が冷たい」と同様に「手」は対象物と考えられるが、「(水仕事をして) 手が冷たい」の場合の「手」は対象物とは考えられない。前者は《相手の手が冷たさを感じさせる》の意味であり、「手」は刺激となる対象であるが、後者は《手という部位で冷たさを感じる》意味であり、「手」は感覚器官と解釈される。これは「私は水が冷たい」「私は(相手の) 手が冷たい」が不成立、「私は(自分の) 手が冷たい」が成立するという差異、また、「水」「(相手の) 手」は「冷たい物」と言えるが、「(自分の) 手」は「冷たい所」と言う差異によっても確かめられる。(この「所」は《場所》とは別の《部分》の意味である。) これは「棘が痛い」と「(棘が刺さって) 手が痛い」の「棘」と「手」の関係と似ている。この点で「冷たい」は(《物》の温度とは別に)《感覚》の意味も含んでいることになる。

「冷たい」は《物》の温度の外に、《非統一的(局所的) 感覚》を意味するわけであるが、多くの場合両者は対応する。例えば、(水に手を入れて)「水が冷たい」「手が冷たい」と言う時、「水」は《物》、「手」の感覚は《非統一的(局所的) 感覚》であって、対応している。しかし、「(冬の夜道を歩いて来て) 手が冷たい」の場合は、刺激となる《物》がない(「夜道」は《場所》であって《物》ではない。この「手」は先と同様、感覚器官である)。これは、感覚が《非統一的(局所的)》なものであるため「冷たい」と言うのだと考えられる。このように《非統一的(局所的) 感覚》の意味は《物》の意味から分離することもあるので重要である。なお、注意すべきこととして、「ぬるい」は例外的に「飲み物が～」のように《物》を表す語としか共起せず、「(飲み物の中に入れた) 手がぬるい」のように感覚部位を表す語とは共起しない。「ぬるがる」とも言えない。「冷たい」の系列の中で「ぬるい」は(後述の「生ぬるい」と共に)《感覚》の意味を弱くしか持たないのである。これは「ぬるい」の《あるべき温度が十分でない》という意味が対象側のものである(主体側のものではない) こと、それに、弱温という、弱い刺激の温度を表すため、感覚器官の反応が起こりにくいのであろう。《感覚》は《物》とも《場所》とも関わるが、人間を取り巻く存在であり人間に大きな影響を与える《場所》とより深く関わる。「ぬるい」が《感覚》の意味を弱くしか持たないことは、「冷たい」等よりも《物》の性質をそれだけ濃く帯びていることを示すであろう。

「長い」「うるさい」の場合は「(長い物を見て)目が長い」「耳がうるさい」とは言えないが、「冷たい」は「(氷に触れて)手が～」と言えるというように、温度は量や音と捉え方が異なるわけであるが、この差異は、触覚(や温度感覚)が視覚・聴覚と違って自覚的感覚であることから、説明できよう。

国広(1989:30-31)は「視覚・聴覚本来の形容詞が非常に貧弱である」ことを説明した中で、次のように述べている。

「目に何かが映っているとき、カメラのフィルムに比すべき網膜に像が映っているわけであるが、我々は網膜に像が映っているとは認知せず、その像の元の物が外界に存在しているように認知する。聴覚の場合も事情は平行していて、実際には鼓膜が震動しているのであるが、そうとは認知せず、外界にある物から音が発しているように認知する。この現象は感覚心理学では『遠隔感覚』ととらえられてきたものであるが、認知科学的には『外界投射』と呼ばれる。これに対して他の接触感覚の場合は肌なり舌の表面が何かを感じているというふうに感覚器官の働きがはっきりと意識される。」

このように、触覚は感覚器官の働きが意識されやすく、従って、言語的にも感覚器官を表す語が現れやすいのである。刺激となる《物》がなく、従って触覚によらない「(夜道の)手」の「冷たさ」の場合にも、感覚部位は自覚しやすいので、「手」が主語となりうるのであろう³。

次に、「寒い」の系列と《感覚》の意味との関わりについて考えてみよう。

「寒い」の系列の意味は《統一的感覚》と考えられるが、「(坊主になって)頭が寒い」のように、頭・首筋・背中等、普通毛髪や衣類に包まれている部位が外気にさらされた時には、その部位を表す語を主語として「寒い」と言える。このように本来覆われている部位は保温が不完全になると(そこが外気温の通路となって)直ちに《統一的感覚》に影響するということであろう。頭等については、氷を当てた時、つまり《物》との接触感覚に基づく時には「頭が寒い」とは言えず、「頭が冷たい」と言う。氷を頭に当てていて体が寒くなった時も「頭が寒い」とは言えない。これは、頭に氷を当てた時には、たとえ「寒さ」が生じたとしても、その「頭」は「寒さ」の侵入部位としては解釈できないということで、局所を表す語を主語として「寒い」と言うためには、通常は何か覆われている部位であって、そこが外気にさらされるという条件が必要なのである。「頭」等は「寒い」とも「冷たい」とも共起するが、「手、指」等は通常むき出しであるので「冷たい」としか共起しないことになる⁴。

ところで、「寒い」の系列は《場所》の温度の意味を持つが、この《場所》とは人間の存在空間である。しかし人間の活動全体を考えた時には、それを支えるものとして、空間の外に時間もある。空間と時間とは、共に格助詞「に」で示される、「のびる」「間」等、空間から時間へ意味が派生した語の例が多数ある点などから、言語的には深い関係がある。(《場所》の意味を拡大して、空間と共に時間を含めることも可能であろう。)量の語彙の場合には時間的要素を考慮する必要がなかったが、温度は、空間的にも時間的にも条件付けられる。そこで、「夜、冬」を主語として「夜(冬)は寒い」と言うことができる。(この「夜、冬」は「部屋」よりも一層はっきりと(影山の言う)状況的な意味である。)本稿では「寒い」の系列には《場所》の意味と《感覚》の意味があると考えの

で、《場所》を表す語も《感覚》の器官・主体を表す語も主語となりうることに問題はないが、特に後者が主語となりやすい（このために影山の非場所・生理温度説が生じる）のは、《場所》が明瞭に対象化しにくい、《場所》といっても温度の場合には実質部でなく空間部が問題となるので、一層対象化しにくいためであろう。「春めく」や「しぐれる」が主語を取りにくいのも、《場所（空間部）》の対象化のしにくさが原因であろう。《場所（空間部）》が対象化しにくいことと、「寒い」等の感覚が「だるい」等と似て体の生理的感覚として十分自覚的であることのために、《感覚》の器官・主体を表す語（「体・私」等）が主語となりやすいわけである。

以上のように、「冷たい」系列は《物》の温度と《非統一的感觉》、「寒い」系列は《場所》の温度と《統一的感觉》の意味を持つということになる。次節の体系化に当たっては、《物》と《場所》の対立を中心にして述べ、《感覚》の意味は必要に応じて取り上げることとする。

4. 意味体系

《場所》の語彙の方が単純であるから、先に取り上げる。

4.1. 《場所》の語彙の意味体系

《場所》の温度を表す語彙として「あつい（暑い）」「暖かい」「涼しい」「寒い」がある。（「あつい」「暖かい」は《場所》と《物》の対立が中和している。）これらの語彙の意味関係を調べてみよう。

(1) 両極的反義関係

国広（1982）によると、「出席・欠席」「表・裏」等は、「出席ではない」が「欠席だ」に等しく、「出席だ」が「欠席ではない」に等しいという関係にあり、両極的反義関係である。温度を表す語彙の中で、「涼しくない」は「暑い」の意味、「涼しい」は「暑くない」の意味であるから、「涼しい」と「暑い」はこの関係にある。ところが、「暑い」は「涼しくない」を意味するものの、「暑くない」は「涼しい」を意味しない。「暖かい」と「寒い」もこれと同じである。これはどういうことだろうか。

それは、「涼しい」は「暑い」に依存した意味を持ち、「暖かい」は「寒い」に依存した意味を持つ、という特別な関係があるためと考えられる。つまり、「涼しい」は体温が「暑い」状態から出発して平常温へ向かい、「暖かい」は体温が「寒い」状態から出発して平常温へ向かうので、出発しないままである（否定する）と、それぞれ「暑い」、「寒い」ことになる。しかし、「暑い」（「寒い」）は「涼しい」（「暖かい」）状態から出発する変化ではないので、「暑くない」（「寒くない」）は「涼しい」（「暖かい」）の意味とならず、従って、このような非対称性が生じるわけである。類例を探してみると、「にせ刑事」は「刑事」に依存した意味を持つ（「刑事」の意味を出発点としてその上に意味を加える）ので、その否定は「（本物の）刑事」の意味となるが、「刑事」は「にせ刑事」に依存した意味を持つわけではないので、その否定は「にせ刑事」とはならず、「医者」「銀行員」等となる。「涼しい」「暖かい」「にせ刑事」の意味は有標的なものである。

(2) 連続的絶対的反義関係

山崎（1976）は、中間段階のある反義関係（国広（1982）の「連続的反義関係」に当たるので、この名

称を用いる)を2種に分けて、次のような考察を行っている。

「大きい・小さい」は一方の肯定が他方の否定を意味する(「大きい」は「小さくない」ことを意味する)が、一方の否定は必ずしも他方の肯定を意味しない(「小さくない」は必ずしも「大きい」ことを意味しない)。また、比較構文で、「AよりBが大きい」と「BよりAが小さい」とは同値関係である。従って、これらは「中間段階がある(連続的)反義関係」と言うことができる。

ところが、「嬉しい・悲しい」は、一方の肯定が他方の否定を意味し、一方の否定は必ずしも他方の肯定を意味しない点と同じであるが、比較構文について違いがある。「あの時より今の方が嬉しい」は「今よりあの時の方が悲しかった」と意味が異なり、「あの時は嬉しかった」を前提とする。更に、「どの位大きいのか」という質問は「大きい」ことを前提としていないが、「どの位嬉しいのか」は「嬉しい」ことを前提としているので、「悲しい」と答えられない、という違いもある。

山崎は「長い・短い」「広い・狭い」等も「大きい・小さい」の類とし、これらを「相対的反義関係」と称した。「嬉しい・悲しい」の類としては、感情形容詞だけでなく、「美しい・醜い」のような属性形容詞もあり、これらを「絶対的反義関係」と称した。前者は大小という量の意味を含み、後者は量関係では捉えられない意味を持つとした。

山崎は「暑い・寒い」「熱い・冷たい」は「絶対的反義関係」であって、「単に熱量の大小というようなことでは記述できない」と述べている。本稿はこの考え方に従う。

ここで、温度は高温も低温も連続しているにもかかわらず、「暑い」と「寒い」(及び「熱い」と「冷たい」)が相対的反義関係にないのはなぜか、考えておきたい。

堀哲郎(1994:1252-1253)によると、「温覚と冷覚とが各々独立した感覚であることを示す感覚特異性には、①温点、冷点の存在、②求心神経ブロックにより、温覚と冷覚が分離する、③急激な温度刺激に対する温覚と冷覚の発生潜時のちがい、などの証拠がある。」これらは神経生理学の知見であるが、日常的な経験でも、汗は「暑さ」の程度に応じて出たりひいたりするが、「寒さ」とは無関係である(「寒さ」でひくわけではなく、「涼しさ」でひくと捉えている)。逆に、震えは「寒さ」の程度に応じて起こったり止んだりするが、「暑さ」とは無関係である(「暑さ」で止むのではなく「暖かさ」で止むと捉えている)。(やけどは「熱さ」と関係するが「冷たさ」とは無関係であり、霜焼けは「冷たさ」と(また「寒さ」とも)関係するが「熱さ」とは無関係である)。「高い」と「低い」、「重い」と「軽い」等には、このようなことはないのである。国広(1967)の言うように、体温の温度変化の方向も、「暑い」は温度変化を受ける前の体温が《平常温又はそれより上》から(より)高温へ、「寒い」は《平常温又はそれより下》から(より)低温へと進むので、「暑い」と「寒い」とは(出発時の体温状態は同じことも異なることもあるが)基準点から反対方向に向かっている。「高い」と「低い」は「高さ」として、「重い」と「軽い」は「重さ」として、単純に同じ方向へ増減しているのであって、「暑い」「寒い」がそれぞれ「暑さ」「寒さ」のように別々の方向へ増減しているのと異なるわけである。

更に、「暑い」と「暖かい」の間には同じ高温域での強弱の程度差の関係、「寒い」と「涼しい」の間には同じ低温域での強弱の程度差の関係があるだろうか。「暖かすぎて暑い程だ」「涼しすぎて寒い程だ」と言えるということがあるからである。「～すぎる」の意味は《不都合が生じる程過

度に～だ》の意味であって、類例として「親切すぎてお節介なほどだ」がある。また、「暖かいどころか暑い(くらいだ)」「涼しいどころか寒い(くらいだ)」と言える。この「～どころか～」の意味は、(他の意味もあるが)『XどころかY』の形で、Xくらいの軽いことではすまされず、実はYなのだ、と聞き手の常識や予想から大きくはずれたYを強調する表現となる。例、『結婚しているどころか子供が2人もいる』(『類語例解辞典』(1994)小学館)というものである。

しかしながら、この「程度差」は同じ基準に基づいたものではないと考えられる。つまり、「もっと暖かい」が「暑い」ことを意味するわけではない。「暖かい」が「寒い」状態から出発するのに対して、「暑い」は「暑くも寒くもない、又は、暑い」状態から出発する。基準となる(出発点の)体温が異なるのであって、この「程度差」は基準体温という条件を逸脱してしまっているのである。(「涼しい」と「寒い」についても同様であるので、省略する。)それではなぜ「暖かすぎて暑い程度だ」「暖かいどころか暑い(くらいだ)」と言えるのかというと、「寒い」状態から体温が上昇していく時、平常体温となる時点で心地よく「暖かい」と感じるが、この平常体温の状態が続くと心地よさ(「暖かさ」)は消えて「寒くも暑くもない」状態となる。そして、新たにこの状態から出発して体温が上昇していく時「暑く」感じるのである。このように、語の意味である、出発時の体温状態という条件を廃棄した時、初めて、「暖かい」から「暑い」へ、という「程度差」が成立するのである。この「程度差」は体温の上昇に沿って認められるもので、外界温度は「暑い」の方が「暖かい」よりも常に高温というわけではない。同じ28度でも、「寒い」状態から出発した時には「暖かい」、「寒くも暑くもない」状態から出発した時には「暑い」となるのである。(「暑い」と「寒い」の場合も、出発時の体温状態が互いに異なることがあるが、また、同じこともある。そして、変化の方向が反対である点、よく対称を成している。そこで「絶対的反義関係」という関係を結ぶことになるわけである。)

また、「暖かい」と「涼しい」との間には両極的反義関係も連続的絶対的反義関係も(異基準)程度差関係もない。「暖かくない」とは「寒い」ことであって「涼しい」ことではなく、また、「涼しくない」とは「暑い」ことであって「暖かい」ことではないので、この2語は両極的反義関係でない。また、「暖かい」は「寒くない」ことを意味するのであって「涼しくない」ことを意味するわけでないので、連続的絶対的反義関係でも(連続的相対的反義関係でも)ない。「暖かすぎて涼しい程度だ」「暖かいどころか涼しい(くらいだ)」と言えないので、(異基準)程度差関係でもない。ただ、「暖かい」は《平常温より下》の体温が《平常温》になる時の感覚、「涼しい」は《平常温より上》の体温が《平常温》になる時の感覚であり、両語とも体温が《非平常温》(異常体温)から《平常温》へ移行する(これを《平常温移行》と言うことにする)点が共通しており、共に《快適》という特徴が認められる、ということがある⁵。この《平常温移行》は、「暑い」と「寒い」には認められない。「暑い」「寒い」は体温が高温あるいは低温というバランスを欠いたままの状態であって、共に《不快》である。

語彙の体系化には、国広(1967)の意味分析が参考になる。

国広は、「風呂で十分温まった直後では寒い風に当たっても寒くなく、烈しい運動のあとでは冬でも『アツイ』と覚ることがある」と述べているが、これは、語の意味は外界(「室内」も含む)

温度それだけで条件付けられているのではなく、温度変化を受ける前の体温の状態も重要な役割をしているということである。

先ず、《場所》の外界温度については、《高温》《弱高温》《弱低温》《低温》と設定することにする。山崎(1976)は、「暑い」「寒い」等の連続的絶対的反義関係の説明の中で、これらの反義語は、1本の軸の中間に「暑くも寒くもない」領域を置いて、それぞれの側に「暑さ」の領域と「寒さ」の領域を設けている。これに従えば、4つの温度領域が並ぶことになるろう。

次に、温度変化を受ける前の体温の状態として、国広は、《平常温より上》《平常温》《平常温より下》の3種を設けている(国広は「常温」「以上」「以下」を用いているが、改めた)。具体的には、「涼しい」は《平常温より上》、「暑い」は《平常温又はそれより上》、「暖かい」は《平常温より下》、「寒い」は《平常温又はそれより下》である。変化前の体温の条件を一定にしてみると、体温が《平常温より上》の時は「涼しい」と「暑い」が対立し、体温が《平常温より下》の時は「暖かい」と「寒い」が対立し、体温が《平常温》の時は「暑い」と「寒い」が(中間領域を挟んで)対立することになる。《平常温より上》《平常温より下》は異常体温であり、《平常温》とは異質であると考えられる。(以下、《平常温より上》《平常温より下》をそれぞれ《高温》《低温》と単純に示すことにする。これは《物》の「暖かい」についても同様である。)

これらの内容を表にまとめると、次のようになるろう。「φ」は語が欠けていることを示す。

変化前体温 \ 外界温度	高温	弱高温	弱低温	低温
高温	暑い	暑い	涼しい	涼しい
平常温	暑い	φ(暑くない)	φ(寒くない)	寒い
低温	暖かい	暖かい	寒い	寒い

この表は、外界温度が《高温》であるからといって、常に「暑い」となるとは限らないことを示している。変化前の体温が《低温》である時には、平常体温まで上昇することになるので、快適な「暖かい」となる。外界温度が《低温》である時も、必ずしも「寒い」となるわけではなく、変化前の体温が《高温》であれば、平常体温まで下降するので、快適な「涼しい」となる。体温が《平常温》から出発する時には、「暖かい」や「涼しい」となることはなく、単に「暑い」「寒い」となるだけであって、厳密には異常体温(高温・低温)から出発する時と異なる体系となっていると考えられる。

なお、外界温度によるのではなく、氷を後頭部に当てた時も「寒い」(《統一的感觉》)と言えるのは、この時、氷との接触が普通の瞬間的な仕方と異なって、持続的になっている。《場所》の温度は人体に持続的に影響を与えることを考えると、このような《物》の接触は一種の《場所》的な機能と考えられる。氷は《場所》的に機能することがあるわけであるが、氷自体は《物》であるから、このような時も「氷が寒い」と言えないわけである。これは氷以外についても言えることである。

4.2. 《物》の語彙の意味体系

次に、《物》の温度を表す語彙として、「あつい(熱い)」「暖かい」「ぬるい」「冷たい」があるが、

この内、《場所》的な性質を濃く持つ「暖かい」を除いた語彙の意味関係について考えてみよう。

「ぬるい」については、岩野（1995）が指摘するように、《本来熱いはずのものの温度が十分高くない状態》《本来冷たいはずのものの温度が十分低くない状態》の2つの意味を表すとする話者と、前者の意味のみ「ぬるい」が、後者の意味は「生ぬるい」が表すとする話者と両様ありうる。このように曖昧な点があるのは、両語の表す温度が中間的であり、しかも互いの温度が接近しているためであろう。ここでは、後の立場で考えていく。（「生ぬるい」は複合的であり基礎性が劣っているので、ここまでの考察では「生ぬるい」を「ぬるい」の中に含めて述べてきた。）

この2語は、《本来温度が十分高くあるいは低くあるべきだが、そうでない》という意味である。そこで否定形「ぬるくない」は《十分熱い》、「生ぬるくない」は《十分冷たい》の意味となる。「熱い」「冷たい」にはこれと反対の《十分さ》が認められそうであるが、それは「ぬるい」「生ぬるい」との対比による文脈の影響で生じるものである。これらは《温度が十分高いあるいは低い》という意味でなく、単に《高温》《低温》であるという意味である。《快適さ》が主体に関与する《場所》的な性質であるのに対して、《不十分さ》は物自体の温度を基準にした《物》的な性質であると言える。「ぬるい」「生ぬるい」は《感覚》の意味を弱くしか持たない（「(自分の)手がぬるい」と言えない）が、これも、《物》的な性質である。なお、《平常温移行》は、「ぬるい」「生ぬるい」には認められない。《平常温移行》はそもそも《快適》とつながる特徴であって、《不快》なことが多い「ぬるい」「生ぬるい」とは無縁であるが、《物》的な性質であることから、《場所》的な性質とつながる《平常温移行》とは関与しないと言える。2語とも《不快》である場合が多いが、《本来の温度が不十分だ》という意味と《不快》とは必ずしも一致しない。「ぬるい風呂で気持ちがいい」と言えるからである。

他の語との意味関係は、①の両極的反義関係にあるのは、「ぬるい」と「熱い」、「生ぬるい」と「冷たい」である。「ぬるくない」は「熱い」の意味、「ぬるい」は「熱くない」の意味である。ところが、「熱い」は「ぬるくない」の意味であるものの、「熱くない」は必ずしも（期待に反した）「ぬるい」を意味しない。「生ぬるい」「冷たい」も同様である。これは、「ぬるい」の期待温度が「熱い」であり、「生ぬるい」の期待温度が「冷たい」であり、しかもそこに至っていない《不十分さ》の意味をもつので、否定形にすると、《十分熱い》《十分冷たい》の意味となるわけである。しかし、「熱い」「冷たい」は、それぞれ語の意味が「ぬるい」「生ぬるい」と対立的に《十分熱い》《十分冷たい》であるというわけではないので、否定形「熱くない」「冷たくない」が「ぬるい」「生ぬるい」の意味とならず、そこで、このような非対称性が生じるのである。

②の連続的絶対的反義関係は、「熱い」と「冷たい」に認められる。「暑い」と「寒い」の場合と同様である。

では、「ぬるい」と「冷たい」、「生ぬるい」と「熱い」の間に（異基準）程度差関係は認められるだろうか。「ぬるすぎて冷たい程だ」「ぬるいどころか冷たい（くらいだ）」等と言える。「冷たい」「熱い」の方が程度が甚だしい意味である。しかし、「もっとぬるい」が「冷たい」ことを意味するわけではない。「ぬるい」には《本来温度が十分高くあるべきだ》という期待温度の意味要素があるが、「冷たい」にはこの意味要素がないからである。従って、この「程度差」も、同じ基準に

基づいたものではないのである。「生ぬるい」と「熱い」についても同様である。

更に、「ぬるい」と「生ぬるい」の関係はというと、両極的反義関係でも連続的絶対的反義関係でも（異基準）程度差関係でもない。「ぬるくない」とは「熱い」ことであって「生ぬるい」ことではなく、「生ぬるくない」とは「冷たい」ことであって「ぬるい」ことではないので、この2語は両極的反義関係でない。また、「ぬるい」は「熱くない」ことを意味するのであって「生ぬるくない」ことを意味するわけでないので、連続的絶対的反義関係でも（また連続的相対的反義関係でも）ない。「ぬるすぎて生ぬるい程だ」等と言えないので、（異基準）程度差関係でもない。ただ、「ぬるい」「生ぬるい」は《本来温度が十分高くあるいは低くあるべきだが、そうでない》という点が共通しており、共に《不十分》という特徴が認められる、ということがある。

以上をまとめると、下の表のようになろう。

「φ」は語が欠けていることを示す。例えば、期待温度が《十分高温》の時、《物》の《低温》を表す語が欠けているが、これは、期待温度が《十分高温》の時には、《高温》について《十分》か《不十分》か（《物》の温度が《高温》か《弱高温》《弱低温》か）を問題としているのであって、《低温》は考慮外だからである。期待温度が《十分高温》でありながら《物》の温度が（予想をはるかに越えて）《低温》だった時、「ぬるい」とは言えないので、「冷たい」と言うことになるだろうが、この「冷たい」の意味は期待温度に関与していない（表では《無》で示した）。つまり、この「冷たい」は「ぬるい」と同一の基準に基づいた表現ではないことになる。期待温度が《十分低温》の時、《物》の《高温》を表す語が欠けているのも同じ理由による。

対応が分かりやすいように《十分・不十分》の特徴を記したが、「熱い」「冷たい」は語としてはこの特徴は持っていない。期待温度のある場合と無い場合とでは、厳密には異なる体系となっていると考えられる。

なお、期待温度が無い条件の「熱い」「冷たい」は、《物》の温度でなく外気温度の《低温》によっても、「（冬の夜道を歩いて来て）手が冷たい」のように言うことができるが、これは感覚が局所的（非統一的）という条件に基づいたものである。感覚が局所に限られるのは、《物》の温度の性質であって、この場合の外気温度は《物》の温度と似た働きをしていることになる。

物の温度 期待温度	高温	弱高温	弱低温	低温
十分高温	熱い(十分)	ぬるい(不十分)	ぬるい(不十分)	φ
無	熱い	φ(熱くない)	φ(冷たくない)	冷たい
十分低温	φ	生ぬるい(不十分)	生ぬるい(不十分)	冷たい(十分)

最後に、「暖かい」を取り上げる。

国広（1967：19）は「暖かい」の意味を「該当の体一部が常温以下である時わずかな程度の熱が伝えられる時の感覚」と分析している。ここには《快適》という特徴が認められていないが、「該当の体一部」、つまり、局所が「常温以下」で「わずかな程度の熱が伝えられる」時には、局所の《平常温移行》が不十分ながら起こるので、《快適》は認められるであろう。渡辺（1970）も「快」という特徴を認めている。ただし、《物》の温度の場合には《場所》の温度の場合の《統一的感覚》

と違って、《非統一的（局所的）感覚》であるので、《快適》といっても程度は低いものである。《快適》の度合いが強くなるのは、お茶・ご飯のように飲食物の場合で、これらは体内に取り入れるので、接触も持続的であり、《統一的感覚》に影響しやすい。《非統一的（局所的）感覚》もこの場合には《統一的感覚》に近くなるので、お茶等のように体内に取り入れるものは《場所》に近い性質を持つと言えよう。国広は、「熱い」「冷たい」については「該当の体一部」が「常温以上」とか「常温以下」とかの意味要素を認めていない。この点から、「暖かい」と「熱い」「冷たい」との異質性、つまり「暖かい」がより濃く《場所》性を持つことが指摘できよう。中でも、《場所》的な「暖かい」と《物》の性質の強い「ぬるい」「生ぬるい」とは隔たりが大きい。そこで、「暖かい」と「ぬるい」「生ぬるい」を1つの体系の中に入れることをしなかったわけである。

なお、《場所》の語彙の「暖かい」と「涼しい」に当たる語として、《物》の語彙には「暖かい」しかなく、もう1語が欠けている。これについて渡辺は、「接触感覚を伴って快い、高温弱の感覚を表わす語として『あたたかい』があるのに対して、接触感覚を伴って快い、低温弱の感覚を表わす語を日本語は欠くのであって、『つめたい』をもってこれに充当する」と述べている。低温域には語が欠けているので、「冷たい」が《弱低温》まで意味しやすいわけであるが、しかし「冷たい」は《平常温移行》の意味があるわけではなく、語の意味としては《快適》という特徴がないことになる。

「熱い」「暖かい」「冷たい」の意味関係について考えてみよう。

①の両極的反義関係にあるのは、「暖かい」と「冷たい」である。「暖かくない」は「冷たい」の意味、「暖かい」は「冷たくない」の意味だからである。しかし、「冷たい」は「暖かくない」を意味するものの、「冷たくない」は「暖かい」を意味しない。その理由は「暖かい」と「寒い」の場合と同じ様に考えられる。

②の連続的絶対的反義関係にあるのは、既述のように、「熱い」と「冷たい」である。

次に、「暖かい」と「熱い」の間に（異基準）程度差関係があるだろうか。「暖かすぎて熱い程だ」「暖かいどころか熱いくらいだ」と言える。「熱い」の方が程度が甚だしい意味である。しかし、「もつ」と暖かい」が「熱い」ことを意味するわけではない。「暖かい」には《変化前の局所温度が平常温より下》という意味要素があるが、「熱い」にはこの意味要素がないからである。従って、この「程度差」も、同じ基準に基づいたものではないことになる。（「冷たい」にも《変化前の局所温度が平常温より下》という意味要素はないが、しかし、「暖かい」は「冷たい」状態から出発して《平常温》へ向かうので、出発しないままである（否定すると、「冷たい」ことになる。そこで、「暖かい」と「冷たい」とは（非対称的ではあるが）両極的反義関係を結ぶのである。）

では、これらの語彙を体系化してみよう。

《場所》の語彙の場合、外界温度も体温も条件として強く働くが、《物》の語彙の場合には、《物》の温度（《場所》の外界温度に当たる）が条件として強く働き、変化前の局所温度（《場所》の体温に当たる）は弱くしか働かない。例えば、外界温度が同じ《高温》でも、変化前の体温が《平常温》の時には「暑い」と感じ、変化前の体温が《低温》の時には（一時的であるが《平常温》の状態になるので）「暖かい」と感じるということがあったが、ここでは、《物》が《高温》であれば、変化前

の局所温度が《低温》であっても（《平常温》の状態が瞬時的であるために）「暖かい」と感じることはない。それは、《物》の温度が外界温度よりも上下に激しく変化すること、局所との直接接触による伝導効果が外界温度の効果よりもはるかに大であることのためである。では、《物》が《高温》で変化前の局所温度が《低温》という条件の時、「熱い」を認めるべきかという、それは無理であろう。もしもここに「熱い」を認めると、「暖かい」と「熱い」が同じ基準を持つことになってしまう。確かに両語の間には程度差関係があるが、その基準は既述のように異なっているのである。「暖かい」は局所温度が《低温》から出発して《平常温》になるかどうかということの問題とするので、出発しない（局所温度が上昇しない）状態である「冷たい」とは関係するが、「熱い」とは関係しないのである。つまり、変化前局所温度（及び体温）の《低温》《高温》という条件は《平常温》と対立するものとして設定されているのである。「熱い」は、《場所》の「暑い」と平行的に、変化前の局所温度が《平常温》で《物》が《高温》の状態を表すとするのが良いであろう。局所温度が《低温》から出発しても、《平常温》を越えて初めて「熱い」と感じるので、《平常温》から出発していると捉えることができるわけである。それでは、局所温度が《低温》から《高温》に変化する途中にある《低温》から《平常温》までの変化はどうかという、前述のように「暖かい」と感じないので、この位置に語が欠けることになる。（表中の「φ」がこのことを示している。《場所》の語彙の場合には、この「φ」の位置に「暖かい」が入っていたことに注意。）

また、局所温度が《高温》の時は「熱い」と「冷たい」が対立するが、この「冷たい」は（「暖かい」との対応から）《弱低温》であって、《低温》ではないであろう。意味関係が分かりやすいように《快・不快》の特徴を併せて記すが、「冷たい」「熱い」は語としてはこの特徴を持っていない。文脈的対立関係から生じるものである。

以上の内容は、次のようにまとめられる。

変化前の局所温度が《無》とは、関与しないことを示すので、この変化前の局所温度は結局《平常温》ということになる。（《平常温》と明示しなかったのは、「寒い」系列が変化前の体温を意味要素として持つのと違って、「冷たい」系列は（「暖かい」を除くと）変化前の局所温度を意味要素として持たないからである。）この時、局所温度は関与しないので、《物》の温度条件が強く働くことになる。

「暖かい」を含んだこの体系は、先の《場所》の語彙体系と「生ぬるい」「ぬるい」を含んだ《物》の語彙の体系との中間的な性質を持つと考えられ、不安定なものである。

変化前局所温度 \ 物の温度	高 温	弱 高 温	弱 低 温	低 温
高 温	熱い(不快)	熱い(不快)	冷たい(快)	φ
無	熱い(中立)	φ(熱くない)	φ(冷たくない)	冷たい(中立)
低 温	φ	暖かい(快)	冷たい(不快)	冷たい(不快)

このように、高温域に属する「あつい」には《物》と《場所》の対立がなく、低温域に属する「冷たい」「寒い」「涼しい」や中間温の「ぬるい」「生ぬるい」には対立が存在するわけである。「暖かい」は《物》と《場所》の対立があるものの、《平常温移行》の意味がある点で《場所》の性質が濃いと考えられる。

5. 結び

《物》か《場所》かという対立原理は、量を表す形容詞だけでなく、温度を表す形容詞にも認められる。更に、温度感覚は自覚的であるために、《非統一的（局所的）感覚》か《統一的感覚》かという対立も加わっている。

《物》は対象化しやすいが、《場所（空間部）》は対象化しにくい。そこで、後者の温度は、《感覚》の器官・主体を主語として言語化されやすくなる。

注

- 1 国広（1967）説（国広（1967：12-21）説と異なることに注意）のこの内容は影山（1980）に基づいている。この考えは国広（1967）には明瞭に示されていないが、影山氏が直接国広氏から指摘されたもののようなので、それに従った。なお、影山（1980）によると、国広（1967：12-21）説は国広氏自身のものではないので、以下、この説は服部（1968）説とする。
- 2 「風（部屋）が寒い」のように、「が」が（総記でなく）中立の意味となって現象文が成り立つのは、「風、部屋」が、人が当たったり、人がその中にいるという意味を含みやすく、このため、知覚現象をありのままに述べるのが可能となるのであろう。「Tシャツ、窓際」は、人が着ている、人がそこに居るという意味が文脈なしには生じにくいために（中立の意味で）「Tシャツ（窓際）が寒い」とは言えず、普通、判断文「～は寒い」となるのであろう。
- 3 渡辺（1996：106-108）は、視覚とそれ以外の感覚の機能の違いが言語に反映した事例を、次のように指摘している。

他動詞「する」は「いい形・明るい色」のように視覚で捉えられるものについては「～をしている」と使われるが、「音・匂・味・手ざわり・気」のように聴覚・嗅覚・味覚・触覚・第六感で捉えられるものについては「～がしている」となる。この時、自動詞の用法を持つことになる。実際は「形も色も、視覚にとらえられた時に、はじめて形であり色であるのだ」が、「視覚は、人間がとらえたものを人間自身から切り離して対象化する」ために、形や色が「対象の側のこととして、対象自体のあり方の一つと見なされる」。これに対して、「視覚以外の感覚でとらえられる音や味や匂は、感覚にとらえられた時に、はじめて音であり味であり得る」のであって、対象化され得ない。「人間の感受において音が実現し匂が実現する」ために「『Xがスル』と自動詞的に表現される」のである。（要旨）

聴覚が視覚と同類でない点が国広の説明と異なるが、視覚の特異性がよく捉えられているであろう。実は、聴覚についても「この鳩笛はいい音色をしている」と言えるので、視覚に近い面を持つと考えられる。また、「外で稲光がした」と言えると思われる。視覚で捉えられるものでも、「稲光」は「形・色」と違い、「まぶしい」ものであって、感覚にとらえられた時にはじめて稲光でありうるということであろう。「まぶしい」は痛みに似た感覚であって、感覚部位を特定しやすいので「目が～」と言うことができる。

- 4 「冷たい」系列と「寒い」系列の主体側の意味の差異は、《非統一的（局所的）感覚》と《統一的感覚》というものであるが、これは、「痛い」と「苦しい（ここでは精神的でなく生理的な意味を問題としている）」の差異と類似したところがある。「痛い」は表在・深部共にありうる局所的痛覚、「苦しい」は深部的で全身に影響を及ぼす痛覚（《統一的感覚》と言ってよいであろう）で、「局在がはつきりせず、吐き気を催し、しばしば発汗、血圧の変化を伴う」（ギャノング（1994：138）という「深部痛覚」を含むものである。「冷たい」と「痛い」は《非統一的（局所的）感覚》であるので、「私

は足が冷たい」「私は足が痛い」の「足」を除くと文が不安定になるが、「寒い」と「苦しい」は《統一的感觉》であるので、「私は胸が寒い」「私は胸が苦しい」の「胸」を除いても安定している。（「痛い」「苦しい」と対応する動詞「痛む」「苦しむ」についても、「私は足が痛む」の場合「足」を除くと文が不安定になる。一方「私は苦しむ」の場合「胸」を加えることはできない（原因格「胸で」なら可能）ので、「苦しむ」は「苦しい」よりも一層明瞭に《統一的感觉》である。）

しかしまた、「冷たい」と「痛い」には重大な違いもある。「冷たい雨」が自然なのに対して「痛い刺」は不安定（「刺が痛い」は自然）である。言語的に、「冷たい」は《物》の温度という対象側の意味が可能であるが、「痛い」は対象側の意味は極めて弱いのである。この言語的差異は、「飲み物が冷たくなる」「飲み物を冷たくする」は成立するが、「釣り針が痛くなる」（手に触れた時痛く感じるように針が鋭くとがる、の意味）「釣り針を痛くする」（針を鋭くとがらせる、の意味）は不成立という文脈の機能にも反映している。

- 5 なお、国広（1967：19）が「暖かい」には「体温が常温で熱が加えられもうばわれもしない時の体全体の感覚」の意味もあるとしているように、この語には《高温と低温の中間温》を表す意味もありうるであろう。ただ、これは劣勢と考えられるので、ここでは取り上げなかった。この「暖かい」は、《平常温移行》がないが、《中間温》であるために《不快》というわけではなく、《快・不快》には積極的に関与しないであろう。

参考文献

- 安部 清哉（1985）「温度形容語彙の歴史—意味構造から見た語彙史の試み—」『文芸研究』108：39-51.
- 岩野 靖則（1995）「ヌルイをめぐる温度表現について」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』301-318. 明治書院
- 影山 太郎（1980）『日英比較語彙の構造』松柏社
- ギャノング, ウィリアム F.（1994）『医科生理学展望』（市岡正道・他訳）丸善
- 久島 茂（1993）「日本語の量を表す形容詞の意味体系と量カテゴリーの普遍性」『言語研究』104：49-91.
- 国広 哲弥（1967）『構造的意味論』三省堂
- 国広 哲弥（1980）「影山太郎著『日英比較語彙の構造』」『英語青年』126-5. 261. 研究社
- 国広 哲弥（1982）『意味論の方法』大修館書店
- 国広 哲弥（1989）「五感をあらかず語彙—共感覚比喩的体系」『言語』18-11. 28-31. 大修館書店
- 中山 昭雄（1970）『体温とその調節』中外医学社
- 西尾 寅弥（1972）『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 服部四郎（1968）『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 堀 哲郎（1994）「温度感覚」大山正・今井省吾・和氣典二編『新編感覚・知覚心理学ハンドブック』1249-1261. 誠信書房
- ミュラー, コンラッド G.（1966）『現代心理学入門6 感覚心理学』（田中良久訳）岩波書店
- 山崎 幸雄（1976）「反義関係に関する一考察」『富山大学文理学部文学科紀要』3：1-10.
- 渡辺 実（1970）「語彙教育の体系と方法」森岡健二・永野賢・宮地裕編『講座正しい日本語 第4巻 語彙編』289-310. 明治書院
- 渡辺 実（1996）『日本語概説』岩波書店

付 記

本稿を成すにあたり，お二人の査読者から細部にわたるご指導をいただきました。深く御礼申し上げます。

(原稿受理日：1997年7月3日)

久島 茂 (くしま しげる)

静岡大学教育学部 422 静岡市大谷 836

The semantic system of Japanese temperature adjectives: Contrast between “object” and “place”

KUSHIMA Shigeru
Shizuoka University

Keywords

temperature, object, place, sense, semantic system

This paper aims to systematize temperature adjectives in Japanese. Dimension adjectives are divided into two classes according to whether they refer to an “object” or a “place”: those which refer to objects are systematized based on the shape of the object and those which refer to places are systematized based on the orientation of the place (Kushima 1993).

Temperature adjectives also fall into two classes by the same criterion: *tsumetai* ‘cold’, etc. pertain to “objects” and *samui* ‘cold’, etc. pertain to “places”.

Furthermore, temperature adjectives have the semantic feature of sense unlike dimension adjectives, because temperature sense makes the operation of the organ self-perceptive. *Tsumetai*, etc. are concerned with local sensations and *samui*, etc. are concerned with integrated feelings.

It is certainly for these reasons that a single state of temperature is lexicalized into two classes.